

「終わりの時」の開始直前に地上で見られる出来事 パート2

パートIでは、黙示6章の「第5のラッパ」と12章の「女」が「子」を産むという記述との関連性、つまり患難期の直前に、復活した14万4千人の復讐を求める嘆願に呼応して、ラッパが吹かれ、裁きと患難が開始される事について記しました。

このパートIIでは、パートIで提起した質問。すなわち、患難の開始前に、地上ではどのような状態が見られると考えられるか。

また、天での戦争は、なぜそのタイミングで起きるのか。

何かそれが勃発するきっかけとなる出来事があるのか。

天での戦争の期間。 などについて詳述して行きたいと思います。

その前に、パートIで少し触れましたが、天での戦争と、14万4千人の復活にはどのような関係があるのかについて、もう少し掘り下げてみましょう。

「女」から産まれた「子」は創世記3:15で、「蛇の頭」を砕くことになっているものであり、サタンにとっては最大の脅威となります。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む」(創世記 3:15,16)

この創世記の預言の主要な成就是、この14万4千人の誕生を指し示していると言って良いでしょう。

実際、その3:16の「おまえは、苦しんで子を産む」という記述の「子」は、複数形で示されているからです。(へ語：バーニム)、つまり正確に訳せば、「あなたは苦しんで子供たちを産む」となっています。

「女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。」(黙示 12:2)

(この「女」が「エルサレム」であるという根拠などについての詳細は、レポート「32 「啓示12章の[女]が[子]を産むとはどういう事ですか」をご覧ください)

(ちなみに、この「子」がイエス・キリストであるという解釈もありますが、キリストは、このタイミングで、生まれた分けでも、生まれてすぐに天に挙げられたわけでもありませんので、これをキリストとするのは全くの誤りです。

また、イエスの誕生についての記録は、誕生時の詳細は省かれており、マリアが、産みの

苦しみに叫んだ、という記録もありません。)

サタンと、女の間だけでなく、サタン側にある勢力とキリストの追随者（14万4千人はその初穂）との間にも敵意が定め置かれています。

それで、龍と悪霊たちは、その誕生を阻止するか、さもなければ、産まれたら直ちに滅ぼしてしまおうとするということです。

女は苦しんで子を産むと言われていたように、エルサレムの長い苦難の歴史の後によく「子の」誕生の瞬間が訪れます。

「誕生」は実際には「復活」であり、しるしを付けるというのは、復活した人の中から選抜するという事とも考えられなくはありませんが、ここでは、選ばれた人々が、初穂として復活してくると捉える方が自然ではないでしょうか。

彼らに、「しるしが付けられ終わるまで、何も損なってはならない」と言われていたように、この出来事の直後、患難期が始まります。

祭壇の下で見られた、屠られた魂である、勝利したクリスチャンは、復活すると真っ先に、聖徒たちの敵に対する報復を祈り求めます。

そして、彼らは、同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで、待つように告げられ、そして「白い衣」が与えられます。これがすなわち、天への招待状ということになるのでしょうか。

つまり、神の元へ挙げられます。

それと引き替えに、サタンと悪霊たちが、天から地へと落とされます。

まさに、それこそが、患難期に突入する、「最後の一週」の火蓋が切って落とされる事態を生じさせるきっかけということでしょう。

この出来事をさらに別の角度から記していると考えられるのが、第7の封印が解かれた時の記述です。

「また、別の天使が来て、手に金の香炉を持って祭壇のそばに立つと、この天使に多くの香が渡された。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇に献げるためである。香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った。それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷、さまざまな音、稲妻、地震が起こった。」（黙示 8：3-5）

七つのラッパとの内容の共通点は、患難は、聖なる者たちの祈りが神の御前に達したゆえの行動として開始されると言うことです。

これで、今回のレポートで、命題とした幾つかの質問に対する答の材料が、後ひとつを除いて全て揃いました。

キーワード（キーセンテンス？）を挙げれば、「祈りに対する呼応としての患難の開始」「サタンや悪霊たちと「女の胤（子孫）の間の歴史的敵対関係」、そして、それ故に生じる、抗争、抵抗活動などです。

「後ひとつ」というのは、これまでに挙げた、黙示 6 章、8 章、12 章にもう一つ、ダニエル書 9,10 章が関わってきます。

これから、そのダニエル書について記します。

「そのころわたしダニエルは、三週間にわたる嘆きの祈りをしていた。その三週間は、一切の美食を遠ざけ、肉も酒も口にせず、体には香油も塗らなかった。」（ダニエル 10:2,3）

ダニエルは、なぜ嘆きの祈りをしていたのでしょうか。

ダニエルは、自分たちの惨状を顧み、敵たち対して、行動を起こして下さるように懇願していました。

「主よ、常に変わらぬ恵みの御業をもってあなたの都、聖なる山エルサレムからあなたの怒りと憤りを翻してください。わたしたちの罪と父祖の悪行のために、エルサレムもあなたの民も、近隣の民すべてから嘲られています。

わたしたちの神よ、僕の祈りと嘆願に耳を傾けて、荒廃した聖所に主御自身のために御顔の光を輝かしてください。

神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、わたしたちの荒廃と、御名をもって呼ばれる都の荒廃とを御覧ください。わたしたちが正しいからではなく、あなたの深い憐れみのゆえに、伏して嘆願の祈りをささげます。（ダニエル 9:16-18）

これらの記述から 10 章 2 節の「嘆きの祈り」も当然同様の内容だったと考えられます。

ダニエルはこの祈りを三週間続けました。

そして三週間後に、み使いが訪れました。

しかし、実は、その祈りは、初めから聞き届けられていたことを告げます。

「彼は言葉を継いだ。「ダニエルよ、恐れることはない。神の前に心を尽くして苦行し、神意を知ろうとし始めたその最初の日から、お前の言葉は聞き入れられており、お前の言葉のためにわたしは来た。」(10:12)

それなのに、来るのに三週間もかかったのは、妨害にあっていたからだと説明します。

「ペルシア王国の天使長が二十一日間わたしに抵抗した。」(10:13)

さて、パートIで、「(このフレーズは後に記す事柄の伏線になっています)」と記していたのを思い返していただきたいと思います。

そのフレーズとは、第5ラッパの、「祭壇の下の魂が、復讐を祈り求めた」記述に関して、「実際の行動は少し後になるが、すでにその祈りは、今すでに聞き届けられたので、心配には及ばない。」というのが言外に示されていると考えらる。」と記した部分です。

黙示8章は、「聖なる者たちの祈りが天に届いた」時から、実際にラッパが吹かれるまで、どれほどの猶予があったのか何も記していませんが、14万4千人に「しるし」を付け終わるまでは、「何も損なってはならない」と言われていたように、その業の完成には、ある程度の期間を要すると思われませんが、それを何としても阻止したいという思いに駆られているサタンと悪霊たちは、当然それに、あらん限りの抵抗をすると予想できます。

実際その実現は、自分たちの「終わりが近い」ことの現れであり、自分たちの「頭を砕く」女の胤の存在をもたらす出来事だからです。

ダニエル10章の、3週間(21日間)の妨害に関する記述は、黙示6章や8章と内容的に一致すると思えるという以外には、主要な預言だけでなく、それを伝えに来るときの経緯に関する、この記述自体も預言の一部である、もしくは、預言的な意味を含むと言える、明確な根拠は、ありません。

しかし、「この後に、ギリシャの君がやってくる」などの記述からすると、預言的な意味あいを持っていると考えて良い理由があると思われます。

(この件に関しては、「83 終末期の悪の主演 - ギリシャの君とペルシアの君」の中で、預言的な意味がある可能性について別の角度から考察しています。)

それで、このレポートでは、この記述から、患難前の「天での戦争」は、14万4千人の選抜活動を行うみ使いを妨害しようとした故に、それが、霊者たちの総力戦にまで発展し、戦争という事態になるということであろうと考えます。

言い換えますと、聖徒たちの祈りに呼応して、実行に移そうとすることが、妨害され、実

際に、開始されるまで、三週間あるということです。

そして、この妨害こそが、「天での戦争」であり、それに21日間で費やされという事であると考えられます。

正にその時、大いなる君ミカエルが立ち上がり、龍に対する宣戦布告という事態を引き起こすというシナリオであると考えられます。

では、その3週間の出来事は見ることはできませんが、地上においても何らかの影響があるのでしょうか。

それによって、洞察力のある人々は、そのことを、察知することができるのでしょうか？

今一度、その「天の戦争」の描写に注目してみましょう。

「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。」(黙示 12:7-9)

この描写からうかがえるのは、「霊者たちの総力戦」であり、非常事態であることを考えますと、悪霊たちも、通常業務(?)に携わっている場合ではないと考えられます。

彼らの日課と言えば、国家の背後で操る、さらに宗教、心霊術、占いなどが、聖書の示すところでは、

ということは、この期間だけ、それらが「パタッ」と止むことがあり得るのではないのでしょうか。

一瞬、諸国は、人間の理性を取り戻したかのような振る舞いを見せるかも知れません。

あるいは、悪霊に憑かれていると思える人が正気を取り戻したかのような。

幽霊、心霊現象など、科学では説明できないが、確かに存在すると言われているような現象が、その間、全世界で、全く消失するというようなことが観察されるかもしれません。

つまり、あたかも、地上では、悪霊の影響がまったくない状態が一瞬、現実化するかもしれません。

それで、預言の流れから言って、ダニエル書の最後の(4番目)獣である、ローマが、終末期のローマとして10カ国からなる連合国として明確な形態を帯びた後、地上で上記のようなことが観察されるなら、その後直ちに、サタンと悪霊たちが天から投げ落とされる時を察知することができるかもしれません。